

統合失調症による長期入院患者への退院支援 —退院意欲を引き出すための看護援助の実態—

菊地 淳¹⁾，板橋 直人¹⁾，吉岡 一実²⁾

キーワード：統合失調症，長期入院，退院支援，意欲，看護援助

I. 諸言

我が国の精神障がい者への医療施策は、「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本的理念に基づき、入院の長期化の解消を押し進めた結果、入院患者数の減少がみられてきた。しかし、平成26年の厚生労働省「患者調査」によると、いまだ入院をしている精神障がい者は約31万人おり、そのうち6割の患者が統合失調症患者である。また、統合失調症患者における平均在院日数は、546日と平成14年以降は大きな増減はみられておらず、入院の長期化に対する支援が急務である。そのような背景から、厚生労働省は長期入院における統合失調症患者本人への具体的な今後の支援として、「退院に向けた意欲の喚起」の方針¹⁾を示している。

精神科看護師が長期入院統合失調症患者に対して退院支援の意欲を持ち続けることが困難である²⁾という報告もあるが、看護師側だけの要因でなく、統合失調症患者の入院が長期化してしまう患者、家族、地域の要因と複合的に考えなくてはならない。まず、患者側の要因として、幻覚・妄想といった陽性症状や自閉、意欲の低下などの陰性症状や認知機能の障害、高齢化、長期入院による施設症などが報告³⁻⁴⁾されている。患者家族の要因としては、入院前に患者から受けた暴力などから患者に対する陰性感情や、同居することへの不安などから受け入れに消極的な傾向がある⁵⁾。そして、環境要因としては、精神障がい者に対するスティグマが存在し、地域住民の理解が得られず、住居などの受け皿の拡充が進まず⁶⁾、

退院後の患者をとりまく環境整備も十分とは言えない⁷⁾状況である。

統合失調症患者の退院後のサポートが十分と言えないなか、看護職に起因する退院の阻害要因を調査した谷田部⁸⁾は、看護職が退院および地域生活支援を実際に経験できるような、研修や支援システムの普及が必要であると報告している。

患者本人が退院意欲を持つためには、退院への動機づけが必要である。しかしながら、長期入院に至った統合失調症患者は、長期入院の弊害や認知機能障害⁹⁾などもあり、パターン化した生活を繰り返すなど新しいことを取り入れることが困難である。そのため、退院への動機づけが困難となり、退院意欲が高められない¹⁰⁾とされている。そこで、今後の退院支援を検討するにあたり、今までに報告されてきた研究から、長期入院統合失調症患者が退院意欲を高めるための看護援助の実態を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

文献検索には医学中央雑誌Web版を用いて、2010年から2014年の原著論文を対象とした。検索キーワードは「統合失調症」「長期入院」「看護」の組み合わせとし、181の文献を抽出した。そのうち、退院支援の看護に言及していた27の文献を研究対象とした。

まず、研究対象の文献を、タイトル、発行年、キーワード、目的、対象者（性別、年齢、入院期間）、支援内容の項目に分類し、一覧表を作成した。そして、27の文献に記載されていた退院支援に関する看護援助内容のみに着目しコード化した。そしてコード化したものから意味内容の類似性に基づいてサブカテゴリー、カテゴリーを作成した。

なお、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは< >を用いて表記した。

1) Jun Kikuchi

日本保健医療大学看護学部

1) Masato Itabashi

日本保健医療大学看護学部

2) Kazumi Yoshioka

金城大学看護学部

Ⅲ. 結果

1. 研究対象である統合失調症患者の特性

27の文献で対象とされた事例の人数は女性12人、男性22人の合計34人であった。平均年齢は51.7歳、平均入院期間は17.55年であった。

2. 精神科看護師の援助内容

精神科看護師の看護援助数は76件の援助として抽出しコード化した。意味内容の類似性に基づいてサブカテゴリー、カテゴリーを作成した結果、長期入院統合失調症患者への看護援助として、【退院後の生活のイメージがもてる関わり】、【退院後の生活準備の援助】、【服薬の自己管理の援助】、【金銭の自己管理の援助】、【社会資源の活用についての多職種連携】、【家族の不安に寄り添う】、【患者の不安に寄り添う】という7つのカテゴリーが抽出された(表1参照)。

【退院後の生活のイメージがもてる関わり】には<患者参加型退院計画の実施>退院後の生活のイメージがもてる機会の提供><外出、外泊への援助><患者の社会性を向上させる援助>の4サブカテゴリー、26コードより構成された。

【退院後の生活準備の援助】には<調理技術の獲得への援助><退院のための買い物に付き添う><衣類の整理への援助>の3サブカテゴリー、4コードより構成された。

【服薬の自己管理への援助】には<服薬自己管理への援助>の1サブカテゴリー、10コードより構成された。

【金銭の自己管理への援助】には<金銭自己管理への援助><代理行為の見直し>の2サブカテゴリー、4コードより構成された。

【社会資源の活用についての多職種連携】には<社会資源について多職種との情報交換を行った>の1サブカテゴリー、6コードより構成された。

【家族の不安に寄り添う】には<家族との面会の場を調整する><家族の不安な気持ちに寄り添う><家族へ退院後の支援体制について情報提供>の3サブカテゴリー、10コードより構成された。

【患者の不安に寄り添う】には<看護師が患者の不安に寄り添う援助>の1サブカテゴリー、15コードより構成された。

Ⅳ. 考察

退院意欲を引き出す看護援助について

本研究の結果から、看護師は【退院後の生活のイメ

ジがもてる関わり】を行うことで、退院への意欲を向上させていた。看護師は、患者の退院意欲の有無を考えるまえに、まずは患者が退院のイメージをもつ機会があるのかを考えなくてはならない。看護師は、患者と共に退院後の生活について考えたり、外出や住居を探したりと行動を共にすることで、患者の退院後のイメージを育てていたと考えられる。石川¹¹⁾は、看護師は患者の言語化できない思いを引き出す必要があると述べており、また、長期入院の統合失調症患者への看護実践として、香川¹²⁾は、精神科看護師は、継続的に患者を捉え直しながら可能性を広げる柔軟な臨床判断と患者の希望を引き出す看護介入が必要であると述べている。希望を引き出す看護介入として、精神科看護師は患者と共に寄り添い、地域生活へのイメージを共有し働きかけることで、患者の退院への意欲を引き出そうと試みていたことが考えられる。

長期入院をしていた患者は、退院意欲を持つことで、地域での生活を現実的な目標として捉え始める。新たな目標は、希望と先行きへの不安が生じる。そのため、現実を直面させられた患者や家族には、様々な不安が生じてくる。そこで看護師は【家族の不安に寄り添う】、【患者の不安に寄り添う】援助を行っていた。田嶋¹³⁾は「患者や家族の個別的なペースにあわせて、退院のペースを調整する役割が看護者には求められている」と述べており、常に日常生活を通して関わっている看護師が患者や家族の心情を察し、ときには退院を延期し中断するといった判断¹⁴⁾も看護師には求められる。また、長期入院のためホスピタリズム化した患者は、院内寛解の状態にあり、日常生活は問題がなく自立しているように見える¹⁵⁾。しかし、病院外での生活は患者にとっても経験が乏しい場合もあり、イメージできないことがより漠然とした不安を高め、退院への自信のなさを高めている¹⁶⁾。そのため、看護師は、患者の日常生活機能や社会生活機能が退院後の生活でどの程度機能するのかを見極めると同時に寄り添う看護が必要であると考えられる。

統合失調症患者が退院後、地域で生活するためには、服薬の管理¹⁷⁻¹⁸⁾やコミュニケーション能力¹⁹⁾などの生活のスキルが求められ、向上・習得することで不安の軽減となる。そのために、【退院後の生活準備の援助】、【服薬の自己管理の援助】【金銭の自己管理の援助】など地域で患者が疾患と向き合いながら継続して生活できるための援助を看護師は行っていた。また、【社会資源の活用についての多職種連携】といった多職種と患者の繋ぎ役・調整役も看護師の役割であり、家族への情報提供

表1 精神科看護師による退院支援に関した看護援助内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (援助内容)
退院後の生活のイメージがもてる関わり	患者参加型退院計画の実施	地域移行評価スケールを使用し、A氏の退院に際しての問題を抽出した。 患者参加型看護を提案し、「退院することができる」という最終目標に向け、具体的な計画を本人とともに立案した。 患者の主体性を育むために、患者参加型看護計画を実施した。
	退院後の生活のイメージがもてる機会の提供	退院し地域で暮らすことを現実的に捉え考える機会を提供した。 入院時からのチームメンバーである看護師が、見学や体験などの退院後の支援者との顔つなぎを行い退院後の生活のイメージをもてるように関わった。 患者の社会適応能力の限界を決めず、退院後の環境により近い状態で実際に体験やイメージできるようにした。 具体的な活動による退院後のイメージ作りと支持的フィードバックが重要となる。 A氏に必要な日常生活スキルを具体的にイメージしてもらうために、A氏の困難になっている部分から一緒に考えたり、方法を提案して看護者自身がモデルとなって見せた。 日常生活技術の練習後や体験外出・外泊の後は、本人と話をしながら心理や意向を確認し、体験、フィードバックをくり返し経験を積ませてイメージをもたせた。 治療方針を明確にして、病院は入院治療の場であることを意識できるようにした。 どのような暮らしなら、病院の外で生活していけるのか、本人に病院外での生活を、イメージしてもらう 宿泊訓練を体験することで、実生活に対する戸惑いや不安を次第に感じるようになった。このことから、乗り越えなければならない課題が鮮明となった 多職種会議を開催することで、対象者、家族が安心して退院をイメージできるよう話し合い、解決できるようにした。 B氏の入院中にバスの乗車、ショートステイの体験、ピアサポーターや寮の職員との関わりを通して、今後の生活のイメージを具体化させた。
	外出、外泊への援助	外出・外泊訓練の援助 外泊の計画を立案した 看護寮入寮への意思の維持向上を目的とした日帰り体験面会 受け持ち看護師を中心にかかわりを持ち、同伴外出を行った。 グループホームへの見学、体験入所を提案した。 退院の決まった患者の引越し準備を看護師も関わった。 外泊体験を促し設定した。 A氏、看護師、PSWでカンファレンスを行い気持ちの確認を重ねながら、アパート探しの計画を立てた。
	患者の社会性を向上させる援助	病院外環境に触れ、地域とのかかわりを通して自らが自己決定を行う体験。 対人関係の構築支援 患者と外出することで、患者の気分転換・コミュニケーションがはかれるとともに、患者の社会性も向上した。 患者同士によるグループ会
退院後の生活準備の援助	調理技術の獲得への援助	調理など食事についてやごみの分別など実際の生活スキルについてロールプレイを行った。 調理実習の設定
	退院のための買い物に付き添う	退院のための買い物に付き添う
	衣類の整理への援助	衣類の整理の援助
服薬の自己管理への援助	服薬自己管理への援助	内服自己管理の援助 薬の自己管理を促した。 行動の成功体験を目的とした服薬自己管理 内服薬の自己管理を促した。 服薬自己管理の援助 A氏の薬の自己管理を段階的に進めていくことで、支援の方向性を一致させた。 ①薬の作用、②薬のよい点である病気の症状の改善、③生活がしやすくなるということ、「再発を防ぐ」という効果があるということを学習した。 継続的な治療と服薬に対する必要性を患者へ伝えていった 服薬教室を行い内服の必要性についての知識の提供を行った。 再発前の前兆についてなどの病状の知識の教育を行った。
	金銭自己管理への援助	金銭自己管理の促し 金銭管理の指導 小遣い自己管理の援助
社会資源の活用についての多職種連携	代理行為の見直し	看護者サイドで行っていた「代理行為」を見直し、患者自己責任の重要性和自主性を促すために最小限の代理行為とした。
	社会資源についての多職種との情報交換を行った	入院中から退院後まで、安心感を持たせるため多職種の同スタッフがかかわった。 ピアサポーターを含む他職種との関係作り。 社会資源については看護師から他職種に協力を求め調整・協力を得てカンファレンスや日々の情報共有を行った。 他職種での情報交換により支援体制を強化した。 訪問看護・デイケア利用など社会資源について患者に情報提供を行った。 家族調整や施設見学の調整は担当看護師が担当
家族の不安に寄り添う	家族との面会の場を調整する	家族との関係修復と退院への理解を得るために、面会の場面では患者のよいところや作業療法など、がんばっていることを家族へ伝え関係修復に努めていた。 家族、ケースワーカーを含めた関係者との「合同面接」という形で直接A氏と話し合う場を設定した
	家族の不安な気持ちに寄り添う	父親の不安な気持ちに寄り添った。 面会時には積極的に声をかけて、父親の不安な気持ちに寄り添う。 家族のA氏に対する心配ごとに丁寧に答えるとともに、支援体制、現在のA氏の状況などを家族に説明した。 家族に対しても支援者の立場で協力してもらえるよう要請した。
	家族へ退院後の支援体制について情報提供	家族に対し、主治医・スタッフから退院の話を積極的に出して方向性を見出した。 主治医・担当看護師・精神保健福祉士による、家族への方向性の説明と理解および協力を呼びかけ家族へのアプローチを行った。 家族への情報提供 家族へは退院後の支援体制が十分整っていることを説明した 退院後の生活に対して不安を持つ家族に配慮して、宿泊訓練の場所や方法を工夫することで宿泊訓練を実現することができた。 家族へA氏の様子や社会資源の利用について、情報を説明した。
患者の不安に寄り添う	看護師が患者の不安に寄り添う援助	A氏のニーズを知り、A氏自身が思う本来の自分の望ましい姿を明確にしてA氏の未来への可能性とその力を伝えた A氏を患者ではなく1人の存在であることを意識して伝えた。 プライマリナーズが、初回の訪問に行く。ニーズを探ることでA氏の言葉の裏側やアンビバレンツな感情を知る支援をおこなった。 状態に波があり、時には指導的にかかわり、時には支持的に寄り添った。 自己肯定感を高めるかわりを行い、A氏ができているところを会話の中でさりげなく伝え、自分ができていることに気づけるようなかわりを行った。 退院生活を見据えた入院中での正の体験による不安の解消と自信の獲得。 患者が抱えている服薬や治療に対する思いを聞き、看護師がその思いに寄り添った。 看護計画を立案するときは、患者と細かな意見交換をする時間を共有して、患者の「いま」を知って情報を共有し支援につなげた。 担当看護師によるベッドサイドでのかわり心かけ患者へアプローチを行った。 看護師は、積極的に退院を勧める立場と、患者の退院に対するネガティブな気持ちを受容する立場にわかれて役割を分担して関わった。 退院に対しての不安表出の受容 A氏は共同住居での生活を振り返るといきいきとした表情で満足気に話したことを成功体験と受け止め、「退院してみてもどうか」と促した。 毎日病棟スタッフが訪問することで精神症状の悪化に至らず、入所3週目から訪問を隔日とした 病状悪化や困った時のSOS発信の援助

や、＜家族との面会の場を調整する＞といった関わりも患者・家族の不安の緩和になり、本研究対象文献の看護師は実践していた。

不安の緩和と退院意欲の喚起は単独で行う援助ではなく、それぞれが相互に関係性をもつことで効果がある援助であると考えられる。研究対象文献からは、精神科看護師がどのように患者の退院意欲を引き出し、それについて看護師自身が理解をしているのかまでは明らかにされていない。今後の退院支援において、看護技術としての意欲を引き出すプロセスを明らかにする研究も必要であると考えられる。

V. 結論

1. 文献検討により、長期入院統合失調症患者への看護援助は、【退院後の生活のイメージがもてる関わり】、【退院後の生活準備の援助】、【服薬の自己管理の援助】、【金銭の自己管理の援助】、【社会資源の活用についての多職種連携】、【家族の不安に寄り添う】、【患者の不安に寄り添う】というカテゴリーに分類された。
2. 本研究結果より、精神科看護師は患者と共に寄り添い、地域生活へのイメージを共有し働きかけることで、患者の退院意欲を引きだそうと試みていたことが示唆された。

VI. 本研究の限界と課題

本研究では、すべて精神科病棟における看護師による事例研究を対象とし、病院所在地も全国に及んでいた。しかしながら、統合失調症患者が退院を可能にする要因には、退院後の生活を支援する環境や地域性が存在すると考えられるため、そのあたりも踏まえた検討が必要である。また、退院に至らなかった事例を分析し、退院意欲を阻害する要因について検討することも退院意欲を向上させる援助に繋がると考えられる。

引用文献

- 1) 平成26年. 社会・援護局障害保健福祉部. 長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策に係る検討会
- 2) 木村 克典：精神科入院病棟に勤務する看護師の諸葛藤が示唆する精神科看護の問題点, 日本看護研究学会雑誌, 33(2) 49-59, 2010.
- 3) 大溪 俊幸, 綱島 浩一, 齋藤 治, 他：統合失調症入院患者の5年予後に関する研究 退院を阻害す

る原因について, 医療, 56(12) 706-726, 2002.

- 4) 紅林 佑介：精神科病院に長期入院している統合失調症患者の認知機能に関する研究, 日本保健福祉学会誌, 21(2) 9-17, 2015.
- 5) 森谷 瑠璃子, 武田 未来, 高谷 新：患者家族の抱える思いと家族支援の課題 長期入院中の統合失調症患者家族との半構成的面接から, 日本精神科看護学術集会誌, 56(3) 178-182, 2013.
- 6) 福永 一郎, 渡部 三郎, 内藤 桂子：精神障害者の地域移行における住居確保に関する市区町村の支援状況, 日本公衆衛生雑誌58(7) 539-549, 2011.
- 7) 吉村 公一：退院の意向をもつ長期入院統合失調症患者に対する精神科看護師の「退院調整の障壁」精神科看護師の態度からの一考察, 日本精神保健看護学会誌, 22(1), 12-20, 2013.
- 8) 谷田部 佳代弥, 半澤 節子, 永井 優子, 他：慢性統合失調症事例の地域生活に対する精神科病院勤務の看護職の認識 退院および地域生活支援の経験の有無による相違, 精神障害とリハビリテーション 16(2), 178-187, 2012.
- 9) 福田 正人, 鈴木 雄介, 藤原 和之, 他：社会で働くことをどう支援するか 統合失調症の生活障害の特質とその支援, Schizophrenia Frontier, 10(4), 256-262, 2009.
- 10) 西田 光輝, 寺師 英利, 松尾 保, 他：解決志向アプローチを用いた看護面接の効果 治療の動機づけが困難な対象者への援助, 日本精神科看護学術集会誌, 56(2) 39-43, 2013.
- 11) 石川 かおり：精神科ニューロングステイ患者を対象とした退院支援における看護師の困難, 岐阜県立看護大学紀要, 13(1), 55-66, 2013.
- 12) 香川 里美, 名越 民江, 栗納 由記子, 他：長期入院統合失調症患者の退院支援に関する熟練看護師の看護実践のプロセス, 日本看護科学会誌33(1), 61-70, 2013.
- 13) 田嶋 長子, 島田 あずみ, 佐伯 恵子：精神科長期入院患者の退院を支援する看護実践の構造, 日本精神保健看護学会誌, 18(1), 50-60, 2009.
- 14) 石川 かおり, 葛谷 玲子, 高橋 未来, 他：精神科長期入院患者の退院を支援する看護の検討, 岐阜県立看護大学紀要 14(1), 131-138, 2014.
- 15) 公益社団法人日本精神保健福祉士協会 高齢精神障害者支援検討委員会(2014). 高齢入院精神障害者の地域移行支援に関する現状と課題—第1版—,

2016年6月1日,

<http://www.japsw.or.jp/ugoki/hokokusyo/201410-k-shien/all.pdf>

- 16) 大部美咲, 山上早苗, 本村幸永, 他: 長期入院統合失調症患者の退院に対する意識とその関連要因の分析, 作業療法 29(2), 183-194, 2010.
- 17) 川村 純子, 中島 美由起: 長期入院患者の服薬指導についての一考察 退院をめざす患者とのかかわりを通して日本精神科看護学会誌 52(1), 28-29, 2009.
- 18) 松田 光信, 河野 あゆみ, 先谷 亮: 統合失調症患者の服薬アドヒアランスに影響する要因の探索 早期退院を控えた患者に焦点を当てた基礎的研究, 神戸常盤大学紀要 5号 1-8, 2012.
- 19) 原田 かおり: 退院促進に対する精神科スタッフの思い 精神科看護師へのアンケート調査より, 日本精神科看護学会誌 49(2), 284-288, 2006.

分析対象文献

- 1) 山田 涼子, 土田 桂子, 阿部 加奈, 他: 精神科長期入院患者の退院に関連する自立への不安 患者の地域生活を踏まえた退院支援の語り, 日本看護学会論文集: 精神看護, 44号, 3-6, 2014.
- 2) 野中 真由子, 丹羽 幸枝, 武田 英之, 他: 安心できる居場所を求めて 長期入院患者の退院支援における安心の保障とは, 病院・地域精神医学, 57(1), 109-112, 2014.
- 3) 山岸鈴子, 三嶋洋一, 大沼直樹: 長期入院患者への支援を変えたりカバリー視点 置き去りの時間を取り戻そう, 日本精神科看護学会誌, 57(3), 172-176, 2014.
- 4) 渡久地政人, 諸見里友子, 三浦富浩: 長期入院患者の退院事例を通して その人らしい人生を獲得するために, 日本精神科看護学会誌, 57(3), 116-119, 2014.
- 5) 菅一: 医療・福祉の連携における看護師の役割 地域移行支援事業を通して, 日本精神科看護学会誌, 57(3), 68-72, 2014.
- 6) 藤川和恵, 湊由季子, 井上雄二, 他: 退院への意欲を引き出す諦めないかかわり 長期入院患者に対する退院支援, 日本精神科看護学会誌, 57(2), 321-325, 2014.
- 7) 奥池逸朗, 萬貴裕: 長期入院患者の退院支援 不安の強い患者へのかかわりを振り返る, 日本精神科看

護学会誌, 57(1), 320-321, 2014.

- 8) 村上博昭, 吉村陽子, 入江千春: 地域移行支援事業を利用した退院支援の1事例, 日本精神科看護学会誌, 57(1), 318-319, 2014.
- 9) 木下彰人: 長期入院患者への退院支援 ピアサポーターとともに, 日本精神科看護学会誌, 56(3), 170-174, 2013.
- 10) 三上きく子, 番屋優子, 吉村範子: 遂行行動の成功体験を目的とした退院支援の試み, 日本精神科看護学会誌, 56(1), 280-281, 2013.
- 11) 前川一代, 西尾寿美子, 増田ゆかり: 退院意欲が低下した長期在院患者と受け入れに困難を示す家族への退院支援, 日本精神科看護学会誌, 56(1), 268-269, 2013.
- 12) 脇平敬雄, 吉田銀次, 真鳥淳子: 長期入院患者の退院支援でみてきた問題 患者の思いに耳をかたむけて, 日本精神科看護学会誌, 56(1), 264-265, 2013.
- 13) 前田博樹, 楠本聡, 山口照之: 長期入院統合失調症患者の単身生活をめざして 地域移行評価スケールを用いた退院支援とその経過, 日本精神科看護学会誌, 56(1), 258-259, 2013.
- 14) 前田貴美枝, 曾木真里, 奥谷広行: 長期入院患者の退院に向けた看護師の役割, 日本精神科看護学会誌, 55(1), 486-487, 2012.
- 15) 山下夏香, 藤原静也: とともに取り組む退院支援 ストレングスに着目した患者参加型看護の実践, 日本精神科看護学会誌, 55(1), 482-483, 2012.
- 16) 嘉手苺和彦, 砂川智志, 宜保勝二: 長期入院患者の退院支援のかかわりのなかから 退院を難しくさせた要因, 日本精神科看護学会誌, 55(1), 174-175, 2012.
- 17) 桑水流浩章, 大橋郷子: 精神科社会復帰病棟で「退院準備プログラム」を活用した取り組み 服薬アドヒアランスの向上をめざして, 日本精神科看護学会誌 54(3), 38-42, 2011.
- 18) 森重美: 統合失調症患者への患者参画型看護の進め方の検討 患者と毎月の目標の設定を行い評価や修正をくり返すりハビリテーションを試みて, 日本精神科看護学会誌, 53(3), 331-335, 2010.
- 19) 川上恵子, 永田英年, 河原めぐみ: その人らしさを活かす退院支援 長期入院中の統合失調症患者の退院支援をとおして, 日本精神科看護学会誌, 53(3), 213-217, 2010.

- 20) 岸田昌子, 野田千代子: 長期入院患者の退院を可能にした要因 インタビューガイドを使用し事例を振り返る, 日本精神科看護学会誌 53 (3), 203-207, 2010.
- 21) 藤井陽子, 川島千恵子: 社会復帰プログラムによる退院支援 1 事例を通してグループダイナミクスの有効性を明確化する, 日本精神科看護学会誌, 53 (3), 193-197, 2010.
- 22) 小嶋千春, 岩本清子: 長期入院患者への退院支援 服薬自己管理援助・訪問看護を中心にして, 日本精神科看護学会誌, 53(3), 61-65, 2010.
- 23) 桑鶴洋子: 退院を拒否している患者への有効な退院支援のかかわり, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 242-243, 2010.
- 24) 服部眞澄, 村瀬智子: 長期入院患者の退院促進に向けた援助の現状 援助内容と援助に要する時間の関係についての開放病棟と閉鎖病棟の特徴, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 238-239, 2010.
- 25) 前川恵美子, 西嶋眞由美, 伊藤ゆき子, 他: こだわりの強い患者の退院支援にかかわって A 氏の意味を尊重して, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 124-125, 2010.
- 26) 迫智子, 宮崎ひとみ, 三池和代: 長期入院患者の退院支援をふりかえって グループホームでの自立した生活をめざして, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 122-123, 2010.
- 27) 田辺光子, 藤本美晴: 患者の想いに寄りそった退院支援 看護師の役割と多職種への働きかけ, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 120-121, 2010.